

## 「み言葉の種」

詩編 1 : 1 ~ 6

マルコ 4 : 1 ~ 12

今コロナが猛威を振るっており世界中が苦しんでいます。この日本でも教会は試練に遭っています。私どもは礼拝に集いたくても在宅を余儀なくされ、親しい兄弟姉妹と共に会うことができていません。礼拝で語られるみ言葉はそこで人の心に宿り、この世に広がっていくものです。それが御言葉の存在意義です。イエス様はここで種まきのたとえをされていますが、ここで種とはみ言葉を意味しています。種とは芽を出して大きくなり実を付けるのが自然であり、本来の姿、存在目的です。ですからみ言葉という種は語られて、広がっていき、多くの実を結ぶべきなのです。私どもの教会では目下オンラインでみ言葉を伝えて、なんとか信徒の心へ届けようとしております。一日も早く以前のように教会で皆さんと共に礼拝ができるようにと願っております。

ここではみ言葉が語られても、それが人の心に根付くのがいかに難しいかが察せられます。御言葉の種を取り去るサタンがいます。み言葉を受けて味わって神さまに従って正しく歩もうとするものを阻害します。教会から人を遠ざけようとする見えない悪の力が存在します。せっかくキリストを信じて信仰生活に入ったのに、試練に遭うと離れてしまうことがあります。それは信仰がしっかり心に根付いていないからです。たとえば石地のようなところでは根を深く降ろすことは難しいように、浅く張った根は強い日差しや水不足に遭うとすぐに枯れてしまいますのです。今のような時期に、教会で礼拝が守れなくなる試練に遭うと、信仰の根が浅いと養分が吸収できなくなり、やがては信仰生活が枯れてしまうことがあるのです。またせっかく根が生えても茨がたくさん生えている中では、成長が阻害されます。茨と云うこの世の誘惑が信仰の成長を妨げるのです。この説教はオンラインで配信されてできれば普段の時刻通りに各家庭で礼拝が守られるようにと配慮されていますが、これは他の時間でも聴けるので、せっかくの日曜だからどこか遊びに行って、空いている時間に聴くことにしようという思いにさせるこの世の誘惑があります。この世の茨はとても強いのです。私どもは自分でこの茨を取り除くことができないのです。私どもの心から、手に血を流して茨を取り除いてくださるのはイエス様です。またわたしどもの石だらけの心から根気よく一つ一つ石を拾って取り除いてくださるもイエス様です。そして道端という踏み馴らした固い土、固い心を柔らかく耕してくださるのもイエス様の愛なのです。良い土地に落ちた種は何十倍何百倍にも実を結ぶということですが、私どもの心の状態は、もともとは良い土地ではないのです。それぞれが固い土地であったり、石だらけであったり茨が茂っているのが私どもの心なのです。しかしわたしどもはそれに気づくことなく、自分の心は良い土地であると勝手に思っているところがあるのです。不毛な土地を良くして下さり、茨の誘惑を取り去ってくださるイエス様がおられなければ、私どもの信仰の芽は直ぐに枯れてしまいます。イエス様という良い農夫が手を入れてくださらなければ、私どもの心に信仰は根付かないのです。ブドウがイエス様という枝に繋がっていないと実がならないようにイエス様に留まることが信仰の結実に繋がるのです。

19世紀のフランスの画家でミレーという人がいるのをご存じである方も多いでしょう。彼は農村の風景などで素朴な信仰の絵画を描いた人です。『落穂拾い』『晩鐘』などよく知られています。また『種を蒔くひと』というのも有名です。ご覧になった方も多いでしょう。もし見たことがなければ岩波の本のロゴマークにもなっていますので、おうちにある本のカバーをご覧になるといいかもしれません。岩波書店は本でこの世に思想を伝えることを、種蒔きに譬えてこの絵を使ったのです。

この絵を見ると人はかごから豪快に種を振りまいています。日本のように畝を作って一粒ずつ間隔を置いて丁寧に埋めていくという事はしないのです。良い土地にも、茨が生えているところでも、道端でも、石ころだらけのところでも種は蒔かれて落ちるのです。つまりすべての人に普くみ言葉の種は蒔かれるのです。ここで種を蒔いている人は誰でしょうか。良い土地にも悪い土地にもまんべんなく蒔いている人は神さまであると言えるでしょう。しかしまたその種を蒔く人はみ言葉を伝える者でもあるのです。福音の種をこの世の人に蒔いて伝える人です。それは教会の働きでもあります。伝道の業であります。ミレーの絵を見ると、種を蒔いている農夫は地に足をしっかりつけて勢いよく豪快に蒔いています。それはこの世に生きており、この世にしっかり足とつけて雄々しく福音を宣べ伝えている伝道者の姿です。わたしどもはキリスト者として伝道の使命があります。教会のパンフレットを渡したり、聖書を渡したり、教会に来るのを誘ったりしますが、このような伝道が続けていきますと、この人は繋がりそうだなというような感触を何となく持つことがあります。しかしある時にはまさかこの人がと思っていたのが教会に繋がることもある喜びの驚きを味わうこともあります。信仰を育ててくださるのは神様の業であります。私どもの小さな思いや経験からは計り知れない神様の選びや導きがあるのです。ですから伝道、福音の種を蒔くのは、人間的思いで効率を考えるとなく、豪快に普く蒔くのがよいと思うのです。私どもがすることは蒔くことです。育ててくださるのは神様です。私たちがすることは、収穫を神様に委ねて、神様を信じてひたすらに蒔き続けることです。良い土地に蒔かれた一粒の種からは何十もの種が採れます。またそれぞれの何十もの種から何十もの種が採れるのです。これが神の国の豊かさであります。神の国は一粒の種から最終的にはとても多くの実を結ぶこととなります。最初の一粒の種はイエス様であったことでしょうイエス様という種はそれは地に落ちて多くの実を結ぶこととなります。その種自体は地に落ちて種という存在形式を失いますが、しかしそれは芽を出し成長して豊かな実りをもたらすのです。

私どもの教会では、現在礼拝の讃美歌は讃美歌21を使用しています。最後に566番の歌詞を吟味してください。旧讃美歌にもありまして愛唱された方も多かったのではないかと考えています。

浅き心で事を図らずに、ひたすら福音伝道に励みましょう。そうすれば思わぬところに落ちた種が芽を出して、成長し、大きくなって多くの実を結ぶことがあるに違いありません。